

平成 28 年度 【 学園研究費助成金 < B > 】 研究成果報告書

学部名 生活科学部

フリガナ ハシモトマサヨシ
氏名 橋本 雅好

研究期間 平成 28 年度

研究課題名 空間的特徴を持った保育園における園児の行動特性に関する研究

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	橋本雅好	生活科学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

近年の保育園については、国の施策を見ると、子ども・子育て関連 3 法に先立ち、「先取りプロジェクト」や「待機児童解消加速化プラン」が実施されており、制度的な面での速やかに待機児童対策がおこなわれている。一方で、空間的特徴を持った保育園の建設が増え、保育の質の向上に、ハード面から与える影響を明らかにすることも急務となっている。そこで、平成 27 年度には、空間的特徴を持った保育園における園児の定期的かつ詳細な行動観察調査をおこない、創造力・想像力を育てるプロジェクトが園児の行動に与える影響を明らかにした。このことから、本研究では、平成 27 年度の調査との比較研究として、他の空間的特徴を持った保育園における園児の行動特性を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

1) 空間的特徴を持った保育園の事例分析・文献調査 (5 月～8 月)

空間的特徴を持った保育園の事例を分析する。

2) 空間的特徴を持った保育園の視察・現地調査 (5 月～12 月)

空間的特徴を持った保育園を視察し、保育士へのインタビューや園児の行動を観察し、空間的特徴が園児の行動特性に与える影響について検証する。

以上の 2 点を総合的に分析し、今後の保育園建設に参考となる一指標を示す。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

活動面積率について、各学年の保育室の活動面積率を日にちごとに詳細を分析すると、最も高い活動面積率は3歳児保育室から順に91.62%、91.55%、90.68%と差は1.00%未満であった。しかし、最も低い活動面積率を抽出すると、3歳児から順に73.65%、52.08%、47.15%と差は大きく、4,5歳児では、1回につき外で遊ぶ時間が長いことが考えられる。活動頻度では、広い空間で午睡が集中し、手洗いや歯磨きをおこなう手洗い場に生活が集中していた。また、3歳児保育室では、他と比べて午睡の頻度が高く、これは長時間、午睡に時間を当てているためと考えられる。遊びのみの活動頻度では、全体の共通点として、マットの上でおもちゃ遊び、ソファで絵本、ままごと用のキッチンやその付近のテーブルでごっこ遊び、開けた空間で身体遊びが集中していることが明らかとなった。

昨年度の計8回分の調査データと比較では、昨年度の分析もすべて抽出し、比較した結果、2016年度は全体的に活動面積率が0.95%低いという結果になった。平均値では、3歳児保育室は活動面積率が2016年度の方が4.81%高くなったが、4歳児保育室で6.66%、5歳児保育室で0.85%、デッキで4.93%、多目的室で25.68%、2016年度の方が低くなった。この結果から活動面積率の高低差が小さいのが5歳児保育室といえる。

また、活用頻度では、2016度と同様に2015年度も、広い空間で午睡が集中し、手洗いや歯磨きをおこなう手洗い場に生活が集中していた。遊びのみの活用頻度については、2015年度の方が遊びの種類が限定されていたことが明らかになった。その要因の一つとして、2016年度はテーブルを分散したことや、遊ぶ種類が限られていない新しい家具の追加により、さまざまな空間でさまざまな遊びをおこなっていることが予想される。

本研究において、一時的に確立した空間でも時が経てば変化すること、保育士の空間の操作により、子どもが新たな発見をし、感受性を高めるということが読み取れた。空間的特徴を各々がどう活かすか、どう捉えるか、また、それを伝えていくことが重要と考える。空間的特徴に関心を持ちながら、感受性を高められるよう、今後の保育事業へのさらなる展開が期待される。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①保育室	②活動面積率	③活用頻度	④建築・空間的特徴
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

2017年度の日本建築学会大会、日本インテリア学会大会にて口頭発表をおこない、両学会の査読付論文に投稿する予定である。